

都道府県 番号 40	学校名 福岡県立ひびき高等学校	課程 定時制	学科 普通科	指定期間 平成29年度
---------------	--------------------	-----------	-----------	----------------

平成29年度 高等学校における特別支援教育推進のための拠点校事業 実施報告書（成果報告書）（要約）

1 研究開発課題

「通級指導教室と在籍学級での指導の連続性を図るための工夫」

2 研究の概要

中学校から引き続き通級による指導を必要とする生徒や、これまで適切な支援を受けることなく困難さを抱えたままの生徒に対して、通級指導教室においてだけでなく日常生活においても適切な指導や支援を行えるよう、通級指導教室と在籍学級での指導の連続性を図るための実践研究を行う。

3 研究の目的と仮説等

（1）研究開始時の現状分析と研究の目的

ア．現状の分析

北九州・筑豊地区には、県立高等学校が全日制・定時制を合わせて51校あり、平成29年度には、中学校までに通級による指導を受けた経験のある生徒が、約50名在籍すると想定される。また、その約65%がLD・ADHDの通級指導を受けた生徒である。

イ．研究の目的

通級指導教室と在籍学級での指導の連続性を図り、高等学校における通級による指導が日常的な支援につながるよう実践研究することを目的とする。

（2）研究仮説

ア．拠点校における他校通級を行うことにより、発達障がい等のある生徒に対し、自己理解や他者理解を深めさせるとともに、コミュニケーション能力等、将来の自立と社会参加に必要なスキルを習得させることができる。

イ．毎回の指導の内容等を記入した通級指導連絡帳を活用することにより、通級指導教室での指導を在籍校における日常の学校生活に生かすことができる。

（3）必要となる教育課程の特例

教育課程外で他校通級を行うため、特例等は必要としない。

（4）研究成果の評価方法

ア．通級指導教室に通う生徒が在籍する学校に対して、当該生徒の困難の改善・克服の程度等に関するアンケート調査を実施する。

イ．特別支援教育や医療等の専門家からなる外部専門委員会を設置し、専門的見地から実践の成果と課題を検証する。

4 研究の経過等

(1) 取組の内容

通級指導は10月1日から3月30日まで生徒の時間割に合わせて授業に支障のない時間帯で週1回100分間実施した。授業時数は学校行事や生徒本人の事情により異なっている。

ア. 生徒Aについて

指導目標：物事を客観的・多面的にとらえることができる。
自己肯定感を高め、安定した学校生活を送ることができる。

指導項目：
・自己理解（自分データ作成）
・他者理解（お悩み相談室）
・注意カトレーニング、語彙カトレーニング、漢字パズル

指導時数：12時間

イ. 生徒Bについて

指導目標：作文が書けるようになる。対人関係をうまく築けるようになる。

指導項目：
・1週間の振り返り
・自己分析や性格の把握
・感情を表現する言葉の学習
・自分の気持ちを言葉にしたり、文字にしたりする練習

指導時数：20時間

ウ. 生徒Cについて

指導目標：コミュニケーション能力を高める。特に、「聞く」ことができるようになる。

指導項目：
・1週間の振り返り
・自己分析や性格の把握
・自分の行動の振り返り
・集中して見る、聞く練習

指導時数：17時間

エ. 生徒Dについて

指導目標：自己肯定感を持ち、自立した生活を送ることができるようになる。

指導項目：
・生活スキルトレーニング
・状況理解
・語彙力や注意力を高める練習

指導時数：18時間

オ. 生徒Eについて

指導目標：安定した生活習慣を築くことができる。（時間や提出期限を守る。）
円滑な人間関係が築くことができる。（アンガーマネジメントの方法や相手の心情を思いやる姿勢を身に付ける。）

指導項目：
・自己認知（自分データ作成、性格診断）
・生活スキルトレーニング

・対人スキルトレーニング

指導時数：16時間

カ. 生徒Fについて

指導目標：自分の課題（進路や生活に関する課題）に気付き、それらを意識して行動できるようになる。

指導項目：・一週間の振り返り
・行事の振り返り
・自己分析や性格の把握
・進路（将来）や自立した生活についての考察

指導時数：18時間

(2) 評価に関する取組

ア. 外部専門チームの設置

教育的、心理的及び医療的な観点から通級による指導の対象となる生徒の指導内容及び体制並びに必要な支援に係る助言等を得るため、学識経験者（特別支援教育の専門家）、医師、臨床心理士等5人の委員で組織する専門チームを設置した。

なお、通級による指導の円滑な運営を図ることを目的として、当該委員が出席し、必要な協議等を行う連絡会議を年2回開催することとした。

イ. 第1回外部専門委員連絡会議（平成29年7月20日）

専門チームの助言等を踏まえ、通級による指導の対象となる生徒の判定及び診断的評価を行うとともに、実態把握のための調査票や指導記録用紙等の様式の改善を図った。

個々の生徒に対する評価事項や指導上の留意点等は、実際の指導開始前の段階で通級による指導を行う拠点校に報告され、指導体制構築の一助となった。

各拠点校 対象生徒	○本人・保護者の思い（卒業までに身に付けたい力等） ●専門チームの助言による指導上の留意点等（一部抜粋）
生徒A	○対人不安感を軽減し、適切に対応する行動力を身に付けたい。 ●個別支援の成果を集団の場で生かすことができるよう留意すること。
生徒B	○不慣れな環境でも適切に対応し、行動できるようになりたい。 ●本人の外言語を書き出し、まとめていくなどの支援が必要である。
生徒C	○困った時の適切な言葉遣いや行動の仕方を身に付けたい。 ●苦手なことや協力して欲しいことを考え、整理させる必要がある。
生徒D	○物事の優先順位を判断し、自ら行動できるようになりたい。 ●本人の好きな活動を媒介として、レポート形成を図る必要がある。
生徒E	○期限を守る習慣や持ち物の整理の方法を身に付けたい。 ●今できることを把握し、本人の自覚を促すよう支援すること。
生徒F	○相手の立場や状況に応じたコミュニケーション能力を身に付けたい。 ●本人・保護者への肯定的な言葉かけにより、安心感等を促すこと。
全体	●保護者の思いや願いだけでなく、実態に応じた支援を行うこと。 ●具体的な能力の伸長よりも、ライフスキルに関する支援を行うこと。 ●自立や社会生活に結び付くための自立活動を意識して指導すること。

ウ. 第2回外部専門委員連絡会議（平成30年2月28日）

これまでの指導実践を報告し、成果と課題を確認するとともに、次年度に向けた指導上の留意事項や指導体制の整備に関する助言を得た。5人の委員から受けた主な助言内容は、次のようなものである。

- ・通級による指導の成果は、在籍校における当該生徒の行動変容から見取るべきである。通級指導教室は“予習・復習の場”であり、在籍校との綿密な連携体制を構築すること。また、在籍校では通級指導教室においてどのような内容の指導を受けたか、通級指導教室では在籍校においてどのように指導内容を生かすことができたかを当該生徒が報告する場面を設けることで、指導内容がより一層定着することができる。
- ・対象生徒が在籍校を卒業する場合、進路先との引継ぎを在籍校のみが行うのではなく、通級指導教室も関与できるよう検討すること。
- ・各拠点校で通級指導を担う教員相互の連携や、各自が用いた教材の共有化及び蓄積のために、拠点校間による情報交換の場を設けること。またその際、指導する生徒の実態、指導の実際、成果と課題等を簡潔に報告し合うようにすること。
- ・通級指導を担う教員の相談に応じたり、必要に応じて支援したりできる体制を整備していくこと。

エ. 在籍校に対するアンケート調査

他校通級を行う生徒の在籍校に対して、通級による指導に係る教育上の効果、実施上の問題点及び今後の課題等についてアンケート調査を行った。通級による指導の効果としては、次のような点が挙げられた。

- ・日々の生活を自己管理する能力に関して、一定の伸長が見られた。通級指導開始時は、拠点校に登校する時間がまちまちであったり、遅刻したりすることもあったが、徐々に予定時間前に余裕をもって登校できるようになった。在籍校においても、登校時間が安定してきた様子が見られる。
- ・他者とのかかわり方については、通級指導の前後で当該生徒が接する在籍校での人物に変化がないため判断しにくいところはあるものの、拠点校においては、同年代の人と初対面であっても友好的な関係を築くことができているようである。

また、教育上の効果を4段階で評価したところ、いずれの学校も3段階目を選択しており、概ね高い教育的効果を認めていた。一方で、実施上の問題点や今後の課題については、次のような意見が挙げられた。

- ・通級指導の中で観察された生徒の様子を学校間で共有する機会を定期的に設けたが、それらの様子が通級指導を受けた結果であるかどうかの見極めは困難であった。拠点校・在籍校で生徒の様子や変容をより細かく把握し、共有する必要があるが、関係教員でその時間を確保することが難しい。
- ・今後は、年度初めなどの早い段階で学校間の情報共有の場を設定し、短期的、中期的、長期的な目標を定めることにより、生徒の変容や成長を把握しやすくなるを考える。また、スクールカウンセラーなどの教員以外の力を効果的に活用することで、在籍校と拠点校を交えて生徒をより理解できるのではないかと考える。
- ・拠点校との連携を図る上で有効となる連絡帳が、当該生徒・保護者から速やかに提出されない場合があった。生徒に対する指導だけでなく、保護者との話し合いを繰り返し、状況の改善を図っていく必要がある。

オ. 保護者に対するアンケート調査

保護者に対しては、通級による指導の効果や満足度について4段階で評価するようアンケート調査を行った。指導の効果については、4段階目を選択した保護者が3名で、残り3名の保護者は3段階目を選択した。通級指導を受けた満足度については、4段階目を選択した保護者が5名で、残り1名の保護者は3段階目を選択した。効果のあった点や満足していることについては、次のような感想が述べられた。

- ・ 困った時にどのように取り組むのかを、いろいろな方法で教えてもらって良かった。
- ・ 決められた時間を意識することができるようになった。
- ・ 落ち着いて過ごすことが増えてきた。
- ・ コミュニケーション能力や学習意欲が高くなった気がする。
- ・ 保護者が教えてあげられないことを、指導してくれるのでとても助かっている。
- ・ 身の回りのこと（片付け、手伝い）ができるようになった。
- ・ 生活習慣を見直し、反省ができるようになった。片付けなどについて、どうしてやらないといけないのか考えることができるようになった。

5 研究開発の成果

(1) 実施による効果

ア. 生徒Aについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・ 自分の話を聞いてもらえたことで、ストレスの軽減や心理的な安定が得られるとともに、大人への信頼感が高まった。
- ・ 落ち込んだり自己嫌悪に陥ったりしても、短時間で「まあいいか」と気持ちの切り替えができるようになった。（一方で、そのような前向きな気持ちが継続しないことが課題でもある。）
- ・ 嫌な場面等をフラッシュバックする頻度が減少した。
- ・ 以前に比べ自分の気持ちを素直に表現できるようになった。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・ 自発的にアルバイトを始めるなど、社会的自立に向けた一歩を踏み出すことができた。
- ・ 1月以降は、体調不良により学校を欠席することはなくなった。
- ・ 以前に比べ対人関係によるトラブルは緩和されつつある。

イ. 生徒Bについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・ 一方的にゲームのことをよく話していたが、相手が具体的に尋ねると実際にゲームを見せながら話をするようになった。
- ・ 心配なことや苦手なことなどを聞き、それらのことに対するマニュアル作りを通して、本人は少しずつ不安感を軽減し、心理的な安定を得ている。
- ・ 本人は自分をマイナス思考の人間であると短絡的に認識していたが、通級指導を通して、自分が無意識に否定的な言葉を選んで使っていることに気付いた。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・困っていることを自分から言うことができるようになった。
- ・日常の些細なことなどは誰にも相談せず、自分で判断するべきであると考えていたが、通級指導教員との信頼関係ができるにつれ、どのような悩みでも打ち明けることができるようになった。
- ・自分の素直な感情を少しずつ出せるようになった。

ウ. 生徒Cについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・1月頃から落ち着いて学校生活を送ることができるようになった。以前に比べ、時間を意識して話したり、興奮を抑えて人と接したりできるようになった。
- ・授業中も落ち着いており、発表の際も滑舌が良くなった。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・以前に比べ落ち着いて人の話を聞くことができるようになった。
- ・遅刻をする、忘れ物をするといった出来事に不安感を感じているが、後からその原因を振り返ることができるようになった。

エ. 生徒Dについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・信頼関係ができた相手には、マスクを外して話す時間が増えた。
- ・自身の創作活動について話し、作品を読んで欲しいと見せるようになった。
- ・薬の飲み忘れが減り、部屋の片付けを自発的に取り組むようになった。
- ・家族や友人からほめられた経験を自ら話す機会が増えた。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・帰宅後の記録用紙を作成することで、自宅での家事の優先順位を付けたり、家事を終わらせる時間を意識したりして行動することができるようになった。
- ・保護者は連絡帳に否定的なコメントを記入しがちであったが、少しずつ前向きなコメントを記入するようになった。本人は自宅での自傷行為がなくなり、保護者と言い争う回数も減った。

オ. 生徒Eについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・他者の立場や考えを推測して発言することができるようになった。
- ・1月頃から、生活リズムが安定し、学校に遅刻する回数が減った。
- ・保護者に頼らずに起床したり、家の手伝いを進んで行ったりするなど、自分でできることを主体的に行うようになった。
- ・大人に対する信頼感が高まり、以前に比べ和やかに会話をすることができるようになった。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・期限を守って課題等を提出できるようになった。
- ・かばんの中の荷物などを整理整頓することができるようになった。

カ. 生徒Fについて

(ア) 全般的な本人の様子

- ・相手と視線を合わせて話をするできるようになった。
- ・自分が気に入らないことなどを、少しずつ本音で話すようになった。
- ・自分に不足している力や克服すべき課題を挙げることができた。

(イ) 課題に対する本人の変容

- ・在籍校以外でのクラブ活動を始め、その中で他者と交流し、共通の趣味を持つ相手との仲間作りができるようになった。
- ・相手の立場に立ってアドバイスする内容等を考えることができるようになった。また、自分の親の立場にたって物事を考えることができた。

(2) 実施上の問題点と今後の課題

ア. 担任との情報の共有について

自校通級をする生徒については、通級指導教員が生徒との親密な対話によって知り得た情報を、どの程度担任と共有したらよいか判断に迷うこともあった。通級指導教員だけで判断するのではなく、特別支援教育コーディネーターを含めた組織的な対応により情報共有していく必要性を痛感した。

他校通級をする生徒については、学期に1回在籍校を訪問し、担任や特別支援教育コーディネーターとの情報交換を行った。訪問日以外は電話連絡をすることになったが、より効果的な連携体制を構築できるよう検討していく必要がある。

イ. 専門職等との連携について

担任やスクールソーシャルワーカー、養護教諭とそれぞれ別個に相談したり、連携を図ったりすることはあるが、生徒に関係するその他多くの教職員と情報共有する機会を設定することができなかった。通級による指導を受ける生徒に対しては、教員個々が支援するだけでなく、組織的な支援を行っていくことが重要である。今後は、特別支援教育コーディネーター等が主導し、組織的な支援体制を構築していく必要がある。

ウ. 通級による指導の周知について

通級による指導については、拠点校の全教職員が適切に理解しておくことが大切である。そのため、例えば通級だよりの発行や校内研修会を通して、通級による指導の意義や目的、指導内容やその成果を伝える機会を継続的に設けていく必要がある。

エ. 保護者とのかかわりについて

自校通級をする生徒の保護者との初期面談は、通級指導教員が事前に担任等から必要な情報を得た上で臨んだため、保護者の安心感を高めることもできた。他校通級をする生徒については、事前に十分な情報を得ることなく面談を実施したため、その後の指導内容の選定や保護者の安心感の醸成に時間を要することとなった。

今後は、自校通級や他校通級にかかわらず、生徒の日常生活に係る情報等を十分に把握した上で保護者との初期面談を実施していくようにする。

(3) 次年度に向けた準備状況

通級による指導で使用した教室は、他校通級をする生徒の心理的な抵抗感に配慮して玄関近くの部屋や階段近くの部屋とした。また、拠点校における学校行事や諸事情により、これらの部屋が使用できない場合は、カウンセリング室を使用することもあった。

生徒が通級指導教室を自らの居場所と感じ、毎時間積極的に通うことができるようにするためには、使用する教室を確保するとともに、生徒の作品などを並べたり、教材や備品等を常備したりしておくことが効果的である。今後とも通級指導教室の環境整備に努めていく予定である。